

健康文化

雨の夜の来訪者

今井田二三子

連日の雨は夜になっても止む気配はありませんでした。私はその子に会った時、優しく微笑んだものか、厳しい顔で接したものかと思いながら夜の診療を続けていました。

その女の子が男子中学生に代わって朝の新聞配達を始めたのは一年ほど前だったでしょうか、初めて顔を見たとき以前何処かで会ったような気がしましたが直ぐには思い出せませんでした。それが或る日、記憶の糸の先に可愛く笑っている三才くらいの女の子の顔が浮かび、あの時の子であったと気づき何かパズルの解けたような安心感を覚えましたが、同時に記憶にある女の子は無邪気で、明るく、何時もニコニコとしていて「うん」とか「いや」とか幼い子には珍しく意志表示がはっきりしていたのに今、顔を合わせたその子は、無表情で暗い感じが気懸かりでした。

その女の子が或る朝、診療開始の準備に忙しく立ち働いている私に「トイレを使わせて下さい」とドアの外から声をかけてきました。その朝は、寝過ぎて急いで配達に出たのだと思っていましたが、暫くしてまたトイレの使用を頼まれ少し不思議に思いながらも一方では二、三年前にトイレを改装したのでその淡いピンクのタイルが気に入ったのかもしれないと思ったりしていました。すると或る時、職員の一人が待合室に置いてある漫画の本が少なくなっているのを知らせてきました。初めは漫画好きな誰かが持っていったのだろうと思い大して気にも止めませんでした。次第に本の消える部数が多くなりはじめ、それが女の子のトイレ使用の依頼の日と関連があるのに気づきました。その後、近所でも一寸した事件があり、その子が関わっているのではないかと心を痛めていた矢先、どうした経緯か分かりませんが人を介してその子が詫びに来ると知らされ、その日がその雨の夜だったのです。私はそのことを告げにこられた人に「その子が自発的に私に会いに来ると言うまで強制はしないで下さい」と伝えました。

その子が二才か三才のとき、姉さんとその子を残してお母さんが家を出られ、お父さんが男手一つで育てていらっしゃると誰からともなく耳にしていました。

幼いその子達の世話をしながら自営で金属部品の何かを作っていたお父さんは大変な毎日であったと思います。その頃叔父さん夫妻がその子連れで来院され、少し躊躇の様子で「この子を養子に迎えたいが」と告げられ、更に急いで言葉を続けられ「もしこの子が私達の所へ来るのを『いやだ』と言ったら止めます」と初対面の方の言葉の意外さと、幼い子の意志を尊重された言葉が印象的で心に残りました。更に暫くして、その子が病気の時、今度はお父さんと一緒に来診されたのをみて、姉さんと共にお父さんの許に残られる結果になったことを心の中で喜びました。今は中学生になっているその子の来訪なのです。夜、その子がお父さんと一緒に訪れてくれたとき、何故か幼い日の無邪気な明るい顔が重なって目に浮かび私は「よく来てくれたね、よくきてくれたね」とニコニコして繰り返しているのに気付きました。「漫画の本が読みたければ貸してあげるよ」、「もし欲しければ、はっきりとおっしゃい、全部は駄目だけれど少しくらいだったらあげますよ」、「これからは、しっかりと相手を見て話のできる人になってほしいよ、幼いとき私の顔を見て、うん、とかいや、とってくれた明るい貴女に戻ってほしいよ」その後も何か種々と私は言いましたが最後にその子が顔をあげて「うん」と言ってくれたことにホッとしたのを感じました。しかし、まだ仮面のような表情は変わりませんでした。その表情に幼い日の無邪気な笑いが戻るのは何時の日でしょうか、それを切に願いながら送り出したその子と、肩を落としたお父さんの後ろ姿を包むかのように雨はまだ降りしきっていました。

(内科開業医)